【現代語訳】

嵯峨天皇と弘法大師は、常にご筆跡の腕を競っていた。ある時、（天皇が）お手本をたくさん取り出しなさって、大師に見せ申し上げなさった。その中に特に優れた一巻があったのだが、天皇がおっしゃったことには、「これは唐の人が書いたものである。その名は知らない。どうしてもこのようには学ぶ（真似る）ことができない。素晴らしい宝物である」と、たいそう大切に保存されておられたものを、大師は（天皇に）十分よく（賛辞を）言わせ申し上げた後、「これは空海（わたし）が、書き申し上げたものですが」と申し上げなさったところ、天皇は全く信用なさらなかった。大いに不審に思って、「どうしてそのようなことがあるものか。現在お書きになっている筆跡とは、ずいぶん異なっているぞ。梯子を立てても及ぶものではないだろう」とお話なさったので、大師は「ご不審、ごもっともな言い分がございます。書を離して、合わせ目をご覧くださるとよいです」申し上げなさると、（天皇は）すぐに離してご覧になって、「その年その日、青龍寺にてこれを書す　沙門空海」と書かれていた。天皇は、この時ご信用なさって、「本当に私より優れていらっしゃるなぁ。それにしても、どうしてこのように、当時の筆勢とは完全に変わってしまっているのだ？」とお尋ねなさったところ、「それは、国によって書き換えているのでございます。唐の国は大きな国であるので、その場所にふさわしい筆勢はこのようです。日本は小さな国であるので、それに合わせて現在のようにお書き申し上げているのでございます。と申し上げなさったところ、天皇は大いに恥ずかしく感じなさって、そののちはご筆跡の争いはなくなったという。